

別紙 2

審査の結果の要旨

論文題目 日本語と中国語の動詞句に関する対照研究
 —概念構成における語彙化と構造化を中心に—

氏 名 黄 淑妙

本論文は対照言語学の立場から日本語と中国語における動詞句の語彙化および構造化について比較・検討し、複合動詞形成の根本的理由、単純動詞の語義との相関等を明確にすることによって、両言語の陳述表現における概念構成の性格と特色を明らかにするとともに、日本人による中国語習得、中国人による日本語習得の円滑化に資するにすることを目的としている。

論文は全7章から成っており、第1章は動詞の範疇的意味、動詞複合の構造、動補構造（中国語、「推+開」等）を中心とした先行研究の概観と吟味に充てられ、第2章では日本語の動詞および動詞句の構造記述と、動詞述語文における動詞句の位置づけが行なわれている。第3章では、日本語と中国語における単純動詞の意味構造を分析し、さらに両言語の動詞句の展開構造を照合したうえでテ形補助動詞（「て+みる」等）までを上限として、動詞複合（日）および動補構造（中）における2動詞間の組合せ条件についてそれぞれ仮説を提出し、その検証と修正を行なっている。第4章では、語彙的複合と統語的複合との差異および両立、テ形補助動詞を対象として日本語の動詞複合における文法化の度合いを検討し、文法範疇の形成プロセス、およびそれと表裏の関係にある語義の漂白化を論じている。第5章は中国語における動補構造の意味条件と、同構造における補語要素の文法化の問題とを扱い、その結果を踏まえたうえで、第6章では翻訳と誤用を検討し、概念の構造化・言語化にともなう日中両言語の相違が学習者にいかなる局面で、いかなる障害を与えているかを検出し、それへの対応の方策を探ろうとしている。最後の章では結論と将来の研究への展望が述べられている。

言語の対照研究は外国語教育の基幹部門として重要な役割を負わされているにもかかわらず、それぞれ独自の差異化と構造化によってなりたち、コード化の密度と方式において異なる任意・複数個の言語を比較・対照するという方法論のせいでは不可避的に生じる困難と限界を備えている。たとえば日本語と中国語について「動詞句」という用語を使用した段階ですでに文法範疇および言語化方式の非対応という大きな問題に直面せざるを得ないが、著者は両言語における単純動詞を意味相にもとづいて細分化し、そのレベルでの一致点を探り出

したうえで不一致の範囲と分節方式の相違とを割り出し、さらには同じ意味カテゴリーの区分によって動詞の複合に際し前項・後項それぞれに掛かる制約を明らかにするという方法を採用している。それによれば次表のように、日本語の単純動詞に対しては強/弱結果性、強/弱動作性、状態性という連続の意味相を認めることができるが、中国語の単純動詞に強結果性という意味カテゴリーは存在せず動作性動詞（および弱結果性動詞の一部）を除いて2言語間に一致点は見いだされない。

日本語	強結果性動詞	弱結果性動詞	動作性動詞	弱動作性動詞	状態性動詞	形容詞
中国語	動補構造	弱結果性動詞	動作性動詞	状態性動詞	形容詞	

ここに著者は、中国語ではとくに結果性を明確に表現するうえで動詞+結果補語という構文的手段に訴え、他方日本語においては弱結果性および動作性動詞が複合という手段によって〔+結果性〕を表現する深因を見いだしている。

日本語の動詞の複合に関しては従来「他動性調和の原則」(影山 1996, ほか)が唱えられているが、この原則では説明できない複合動詞が存在していることをきっかけに、著者は意味カテゴリー間の組合せを精査することによって、自他の対立というよりむしろ意味カテゴリーのうえで類似した動作概念どうしが結びつき、また〔+結果性〕〔+限界性〕を表出するために複合手段が用いられることを立証し、この事実を説明すべく①弱動作性動詞複合または修飾原則、および②結果性・限界性補足原則という概略二つの仮説を提唱し、その検証と修正を行なっている。別の角度からいえば、複合動詞には単純動詞と違い〔+限界性〕という別種の意味カテゴリーが加わるという主張になる。

他方、強結果性がある段階から動補構造による表出へ切り替わるとされるとされた中国語についても、動詞と補語との結合に際しては上述の第二原則がほぼ該当することを著者は確認している。動補構造を動詞の分布特性という角度から見ると、もっぱら動詞としてのみ使われる辞項、もっぱら補語として使われる辞項、および動詞・補語両様の用法をもつ辞項の3種類に分かれるが、この点について著者は動詞用法しか持たない辞項には〔結果状態〕を表わす働きがなく、逆に補語としてのみ生起する辞項は〔-意志性、+状態性、+結果性〕の非対格動詞であると結論づけている。

このような制約のもとで行なわれる、日本語においては動詞の複合、中国語の場合は動補構造化は、それぞれある種の辞項が本来の語義を削ぎ落としもっぱらアスペクト的な意味を担う補助動詞ないし補語として固定してゆき、さらには形態のうえでも縮約を起こす、いわゆる「文法化」「脱範疇化」の傾向を見せるが、著者はこのプロセスが格支配の揺らぎと単純化に照応している事実

着目し、日本語の語彙的複合動詞が統語的複合動詞へ、そしてさらには統語的複合動詞の後項が補助動詞へと変化してゆく文法化の諸段階と、中国語の補語における文法化の諸段階とを定式化し、日本語の場合、統語的複合動詞化については空間化>非具体化；時間化>状態化、そして補助動詞に至る文法化については外在的意味>内在的意味>メタ言語的意味>表現緩和的意味という一般化 (Traugott 1989) が当てはまるものの、中国語の場合にはむしろ空間化>非具体化>時間化>状態化という経路をたどり、空間化>時間化>性質化という3段階を普遍視する旧来の説が一語一範疇とも言うる「到」にしか当てはまらないことを論証している。

これらの分析結果にもとづいて、日本語の動詞句における文法化の経路と中国語の補語における文法化の経路は、拡張の傾向においてはおおむね一致しているものの、語彙的形式から統語的形式に移る転換点において興味あるずれを示し、中国語の動補構造においては空間次元における意味拡張が始まると同時に統語的形式への切り替えが起こるのに対して、日本語の動詞句においては時間次元に拡張された段階で転換が生じるという結論が導き出されている。

動詞の複合と動補構造との二者はこのように、第一義的には結果性の表出方式における違いとして捉えられるが、他方これには視点の移動という別の側面もともなうことを著者は指摘している。日本語の動詞複合に加わる制約は前項と後項とが統一的な視点から選ばれることを要求しており、たとえば状態変化+状態変化は適格であるのに状態変化+位置変化というタイプの結合は不適格である。同じ制約は自他同形動詞が複合動詞に組み込まれた際、格支配ないし視点が結合先の動詞に同化するという現象にも見ることができる。この事実を説明するものとしては、ある物体について、単文内でそれを二つ以上の経路 (path) について叙述することができないとする「一義的経路の制約」(Heine et al. 1991) があり日本語には概略妥当するが、他方、中国語の動詞は結果性 (= 結果状態、位置変化) を含意せず、一方補語は結果もしくは位置変化という意味のみを表わすため、動作手側から被動者側への視点移動が自由であり、従ってこの統語形式に関しては一義的経路の制約が成立しないことを著者は指摘している。

まとめとして著者は目的語移動標識「把」、自他同形動補構造の夥しさ等、中国語におけるいくつかの特異事象が能格性という言語特性の作用に関わっている可能性に触れ、また「する/なる」という言語性格論の視点を中国語に適用し日中英の比較を試みているが、これらの問題について詳説するには至っていない。また日本語に借入された漢語動詞は語基そのものに動補構造を内包する場合があります、格助詞の選択あるいはその揺らぎなど興味ある諸問題につながっているけれども、この考察は将来の研究テーマとされている。

ほかにも記すべき点が多いが、ほぼ以上が本論文の主要な論点と具体的な提言および結論の概要である。見るように著者はいくつかの所説や一般化に対して明確な対案を示し、また少なからぬ問題に関して新説を提唱しており、これらは本論文の顕著な達成のうちに数えることができる。しかし特筆すべきは、周到に考慮された立論と、分析の手法および結果を客観的ならしめるために執られた着実・厳正な手法である。具体的に述べると、①分析・対照を行なうに当たっては構造や事象の大枠をまず明示化したうえで、扱おうとする問題圏を特定し、これによってランダムな因子間の比較・対照に陥る危険を細心に排除している点、②種々の理論用語や手法を適用するに際して必ず基本から問い直し、分析や分類の際に照査基準を重視して既存のものについては吟味・改良を加え、そうした参照基準がない場合には自らこれを設定している点、③分類ないし範疇設定に際してはつねに複数個の照査基準を用い、かつ当該範疇のメンバーを特定して一覧表を作成するか、あるいは既存のリストの補完・修正をつうじてより完全なものを提示している点、などは高く評価されるべきところで、これによって記述と論証の精度を高水準に保つことに成功している。

こうして、動詞の意味カテゴリーの設定、単純動詞の意味カテゴリーの分類、非対格性の判定基準、日本語動詞の意味カテゴリー別リスト、中国語動詞の意味カテゴリー別リスト、日本語における複合動詞と中国語動補構造の概念構造（＝項構造）の対照表、日中両言語において許容される意味カテゴリー間の結合表、その他はいずれも追試・修正の可能なかたちで提示されており、これらの問題領域に関して向後無視することのできない確実な基盤を提供したものと高く評価できる。

とはいえ欠陥や改善の余地が全くないという訳ではない。まず叙述スタイルについて、日本語と中国語が独立的に交互に扱われるので各章の論理的連関が見えにくくなっている恨みがある。また同一の事象について複数の、時として理論的枠組みの異なる定式化を引証・吟味することは折衷主義の観を与えかねず、説明方式・説明概念の過剰を統一的な視点から整理する努力が足りなかったことが惜まれる。さらにこの論文の所期の目的という点からいうと、叙述を対象2言語の差異の特定とその内的原因の究明にとどめており、日本語および中国語における概念表出の特性という新しい地点から眺望したとき、両言語の特質についていかなる洞察と一般化が可能になるかより深く追究していないことが惜まれる。しかしこれらの瑕疵は論の根幹を左右するようなものではなく、また多くは著者の将来の研鑽に期すべき事柄であり、本論文の大きな学的貢献をいささかも損なうものではない。以上の理由により、本論文を博士（学術）の学位に相応しいものであると認める。